

古文字學研究文獻提要

賴惟勤監修、說文會編『說文入門』（大修館書店、一九八三年）

表紙に副題のように「段玉裁の『說文解字注』を読むために」とある。全體は四章に分けられ、第一章「許慎の『說文解字』」では、說文の總説、唐代までの說文、ついで宋代の大徐本・小徐本について諸版本の解説があり、說文關連書が紹介される。第二章「段玉裁の『說文解字注』」では、段注の性格として訓詁の書であることを述べ、次にその版本の紹介があり、「讀段注備要書」と「その他の諸注」として關連書籍の紹介がある。第三章「段注の實際」でその體例、つまり段注の仕組・構成・留意點が示される。第四章「段玉裁の古音十七部説」では、上古音研究において、段玉裁の先驅となる顧炎武と江永の説をまず示し、段玉裁の『六書音均表』について述べる。段注末尾に附されるこの書が先に成り、「段注」がその後になった。

現在、字義を知るために『說文』を利用する人は、まずいわゆるこの「段注」を使うであろう。その恰好の入門書である。段注の構成と編纂の経緯、また段注のみならず、『說文』の版本や歴代の主な研究書についても知ることができる。敘述は、學生との會讀の経緯を整理した形を取り、問答によって話が進んでいくので、内容についての理解はたやすいと言えるが、若干冗長のきらいがある。また巻末に索引

がないので、知りたいことが載る該當の頁を辭書のようにすぐに関くということができない。その點じっくりと讀み進めていく必要がある。しかしそれがまた面白く楽しい本である。

この本のもう一つの特徴は書名とは裏腹に、最適の中國「上古音」の入門書となっていることである。段玉裁と他の清末の碩學たちとの上古音研究の進展が如實に語られている。またそこに載せる韻部表は、上古音の分部が一目瞭然となる優れものである。段氏の一七部説と、現在の三三部説が圖示されている。三〇年前の出版であるが、上古音の分部そのものは今も基本的に變わらない。音韻學の入門書としても一讀を勧める。

（村上幸造）